

ティーチング・ポートフォリオ

健康科学大学 健康科学部 リハビリテーション学科

講師 坂本 祐太

1. 教育の責任

私は健康科学部のリハビリテーション学科、理学療法学コースの教員として、専門科目を中心に担当している。主担当を務める科目では、1年生の初年次教育科目の科目責任者、3年生の実習科目及び学外実習科目の担当をしている。その中で、大学教育における学士力の醸成と、理学療法士としての専門性の双方について教育することが責務だと考える。

1年生の初年次教育においては、大学の学びと理学療法の学びを複合させた科目構成を取っている。医学、保健領域においても、社会的要請の変化や領域の細分化によって習得すべき知識は広がっており、学生の学修負荷も増加している。多くの知識を学修し、課題に知識を活用するには能動的な学修姿勢が必須である。私は初年次教育における Active Learning の導入の授業として、前期にアカデミックスキル（ディスカッション方法、論理的思考方法、型によるレポート作成方法、プレゼンテーション方法）を経験し、後期に基礎医学的知識やトレーニング理論を使った Program Base Learning を実施する授業構成を取っている。グループワークでは、学生間評価から学生の参加度を可視化する取り組みや、能力別グループを形成し、学生間の相互作用が高くなる環境構築に着手している。これらの取り組みは、学士を所持する社会人としての基本的能力を成長させる意義があり、将来的に自ら思考し、問題提起、問題解決、そのための行動を行える人材の育成に必要な要素である。さらに、それらの思考する力は、理学療法士としての基本的能力の向上と、専門性の獲得につながると考えている。

さらに、私は様々な領域において予防医学による運動指導を経験している。私は理学療法士として 150 床の地域中核病院に勤務し、急性期から外来に通院する整形外科領域、呼吸器や代謝障害などの内科疾患領域に関わって来た。診療業務に加え、1次介護予防事業や特定保健指導後の運動教室を、市役所や地域包括支援センターと共同して企画・実施し、地域住民に対する予防事業を経験している。また、企業における腰痛予防教室といった産業保健領域での講師や産業保健関連の研究にも取り組んできた。これらの経験を活かし、講義では様々な課題に対して問題発見、解決、調査、研究に興味を持てるように授業を構成している。

2022 年度

科目名	時期		受講者
卒業研究	通年	選択	4 名
日常生活活動学実習	前期	必修	92 名
理学療法演習 I - 1	前期	必修	77 名
基礎演習 II	後期	必修	14 名
理学療法演習 I - 2	後期	必修	77 名

2023 年度

科目名	時期		受講者
卒業研究	通年	選択	8 名
日常生活活動学実習	前期	必修	61 名
理学療法演習Ⅰ－Ⅰ	前期	必修	66 名
基礎演習Ⅱ	後期	必修	13 名
理学療法演習Ⅰ－Ⅱ	後期	必修	63 名
評価実習	後期	必修	61 名

2024 年度

科目名	時期		受講者
卒業研究	通年	選択	12 名
日常生活活動学実習	前期	必修	65 名
理学療法演習Ⅰ－Ⅰ	前期	必修	47 名
基礎演習Ⅱ	後期	必修	13 名
理学療法演習Ⅰ－Ⅱ	後期	必修	47 名
評価実習	後期	必修	65 名

・授業外活動

本学での授業の他に、以下のような活動をしている。

<養成コースの教育運営に関する経験>

1) 理学療法臨床実習調整 担当（H30 年 4 月 1 日から現在に至る）

理学療法士養成校において、臨床実習は比重の重い実習科目である。所属学科の助手、助教として、臨床実習実施の準備を担当した。全学年の臨床実習スケジュールの管理（4 科目）、施設への実習依頼文書の作成、稟議、依頼書の施設への送付、返信結果の集計、学生への実習地希望アンケートの実施、学生の配属案作成、実習施設提出書類の作成、教員への学生指導の依頼、実習成績の集計、出席日数の確認と事務への謝金振込依頼などを実施した。

2) 学科備品管理 担当（H30 年 8 月 1 日から現在に至る）

理学療法士養成校指定規則において指定されている指定備品の管理および学科備品の管理を担当した。指定規則備品および学科備品個数の勘定、保管場所の確認、測定機器の管理、メンテナンス依頼、不足や破損物品の計上、ファイルでの管理などを行った。また、新任教員への物品発注方法の説明、備品管理方法などの説明を行った。

3) 実習指導者会議運営 担当（H30 年 8 月 1 日から現在に至る）

学外実習実施において必要な情報を実習施設に説明するための、会議運営を担当した。該当施設への参加確認アンケートの送付、集計、式次第作成、教員への配布資料の作成依頼、印刷、学生面談スケジュール調整、学生指導などを行った。新型コロナウイルス感染症拡大後は、オンライン会議システムを利用したオンラインでの実習指導者会議を開催した。

4) 就職試験対策、指導（H30 年 9 月 1 日から現在に至る）

副担任の学生および希望のあった学生に対し、就職相談や就職試験対策、指導を行った。就職先選定についての助言、履歴書の訂正、模擬面接などを行った。

5) 保護者説明会の運営および教務関連の解説（H31 年 4 月 1 日から現在に至る）

保護者に向けた情報提供および個別相談を目的とした保護者説明会の運営を担当した。保護者への説明会参加アンケートの作成、集計、式次第作成などを行った。R4 年度においては、教務委員会として、大学の授業構成、出席管理、成績判定、カリキュラム、オンライン授業導入の推移、オンライン授業の効果判定、今後の授業における課題などについて解説を行った。

6) 理学療法士・作業療法士指定規則改定に伴う学外実習書類作成ワーキンググループ（R1 年 6 月 1 日から R1 年 9 月 1 日）

2020 年度の指定規則変更に伴う指定申請書類作成の一部を担当した。登録している実習施設の一覧が必要であり、実習施設に情報更新を依頼し、提出書類を作成した。

7) 大学紀要委員会 委員（R2 年 4 月 1 日から R3 年 3 月 31 日）

大学の紀要を管理する委員会に所属した。投稿原稿の依頼、査読依頼、投稿文章の添削、次年度紀要の企画などを行った。

8) 教務委員会 委員（R2 年 4 月 1 日から現在に至る）

学科の代表として教務委員に所属した。1 年生に対する入学時ガイダンス（教務関連、規則、履修指導）および上級学年に対する履修指導を担当した。履修説明の理解が不足した学生については個別に履修指導で補習した。留年した学生について担任、副担任に必要な履修科目について情報共有を行った。学科における成績判定会議において、大学規則による基準を提示した。留年に該当する学生の早期抽出、管理転学科を行う学生について個別に履修状況を確認し、情報を共有した。入学前課題、オンライン授業や課題の基準、その他個別の事例などについて会議で協議した。

9) Teams 授業サポートチーム 委員（R2 年 6 月 1 日から R3 年 3 月 31 日）

教務委員会のワーキンググループとして、Teams によるオンライン授業をサポートするチームに所属した。オンライン操作方法の補助、トラブルシューティング、対面授業をオンラインで実施するにあたり修正が必要な授業計画の確認、実際の実施方法の提案などを行った。

- 10) 教務委員会 授業スケジュール作成ワーキンググループ 委員 (R2 年 12 月 1 日から現在に至る)

次年度の授業スケジュールを作成する教務委員会のワーキンググループに所属した。新型コロナウイルス感染症の対策として、対面授業とオンライン授業の比率を検証し、実現可能な水準の検証を行った。大学に登校する人数の概算から、各学年の授業は特定の曜日を対面授業とオンライン授業に定めた。所属教員の週間スケジュールを把握し、教養系共通科目、専門科目の配置を検討、会議にて決定した。

- 11) アセスメントポリシー検討委員会 委員 (R6 年 4 月 1 日から R7 年 3 月 31 日)

本学のアセスメントポリシーおよびアセスメントプランの策定を目的とした学内検討委員会に、学科代表として参加した。高等教育における教育成果の可視化と自己点検による教育の質保証を推進するため、他大学のアセスメント関連施策の調査を行い、学内の既存アンケート等を整理・体系化した上で、年間スケジュールを含むアセスメントプランを設計した。策定したアセスメントプランは、2025 年度より運用されている。

- 12) ストリートダンスサークル 顧問 (R3 年 4 月 1 日～現在に至る)

学生より希望があり、ストリートダンスサークルの顧問を務めた。感染対策の管理、他キャンパスの学園祭での手続き、ダンス音楽の作成、発表時の音響、プロデュースダンス動画の編集とナレーション作成、発表会の企画など学生活動の支援を行った。学生の能動性を高め、挑戦する心の成長を促すことを目的とした。

- 13) 生体構造機能研究会 (サークル) 顧問 (R3 年 4 月 1 日～現在に至る)

研究活動を行っていた学生と協力し生体構造機能研究会を立ち上げ、顧問を務めた。基礎医学実験の実施、SDGs 研修会帯同、下田臨海実習企画・運営、動物の飼育、勉強会開催、Healthy Earth Project (河口湖お散歩ゴミ拾い)、学会参加、卒業研究への参加誘導、SNS および Web サイトの運営など、学生活動の支援を行った。

- 14) ウェイトリフティングサークル 顧問 (R3 年 4 月 1 日～R5 年 3 月 31 日)

学生より希望があり、ウェイトリフティングサークルの顧問を務めた。感染対策の管理、試合参加の管理など学生活動の支援を行った。

15) 河口湖お散歩ゴミ拾い 計画、実施 (R3 年 4 月 1 日から現在に至る)

生体構造機能研究会の企画である Healthy Earth Project の一環として、河口湖お散歩ゴミ拾いを実施した。河口湖周辺の清掃 (地域の健康)、活動量の増加 (個人の健康)、交流の促進 (社会の健康) をテーマに、学生や教員、外部団体とも協力して活動を行った。

16) 動物飼育活動の実施 (R4 年 4 月 1 日から現在に至る)

飼育体験を通じて生命倫理、生命に対する責任を養うこと、ヒト以外の生命に触れることで、学習の原動力となる知的好奇心を刺激し、体験を通じて科学的思考を身につけることを目的として、研究室で爬虫類 (フトアゴヒゲトカゲ、ニホンヤモリ) の飼育を行った。

17) 学科における学外実習の手引書の改定 (R4 年 4 月 1 日から現在に至る)

2020 年度の理学療法士・作業療法士指定規則改定に伴う学外実習方法の変更に際し、学科規定である学外実習の手引きを改定した。改定前後では目標となる到達点が変更されたため、大学での運用方法を検討し、評価基準、学外実習の方法、学外指導者に求めることなどを記載した。2023 年度において製本、実習協力施設に送付する段階である。

18) 下田臨海実習の企画および帯同 (H29 年 8 月 1 日から現在に至る)

生体構造の学修を必要とする学生の興味関心を促進する課外の企画として、筑波大学下田臨海実験センターおよび山梨大学解剖学講座構教員と協力し、下田臨海実習を計画、実施した。多様な形態をする海洋生物の構造的特徴から、系統樹に分類をする生物分類学に基づき、海洋生物の採取、観察、実験、研究発表を行う実習である。参加した学生は生物に対する好奇心を刺激される傾向があり、能動的に海洋生物の観察を行う傾向がある。また、他大学学生や他大学教員、施設職員と交流し、視野が広がったとアンケートに回答する学生も多い。

<研究に関する経験>

19) 介護予防事業での講師

20) 産業医学関連の講師

21) 特定保健事業関連の講師

22) ヘルスツーリズム事業での講師

23) 動物実験 (肥満・糖尿病における腸管免疫機能の検証)

24) 動物実験 (生体内凍結技法による骨格筋収縮弛緩動態の解明)

25) スポーツ心理 (アスリートにおける慢性痛・メンタルヘルスの調査)

- 26) 教育領域の研究（学生のモチベーションの調査）
- 27) 教育領域の研究（学生指導におけるジェンダーギャップ）
- 28) 教育領域の研究（グループワークにおける学生参加度の可視化）

17～20)

私のヒトにおける研究領域である予防医学に関連した研究活動である。経験を授業に反映でき、興味のある学生に経験させることも可能である。

22～23)

私の基礎医学領域における研究活動である。初年次より積極的に学生に声をかけ、興味のある学生には卒業研究の実施までを指導する。

24)

私のヒトにおける研究領域である行動医学に関連した研究活動である。学生より希望があり、卒業研究テーマとして新規に着手している。

25～27)

私の教育領域における研究テーマである。学生教育の可視化につなげるべく着手した研究であり、教育指導に直結するよう取り組んでいる。

2. 教育の理念・目的

私の教育の理念は、意欲や習熟度に合わせた教育を提供すること、できる限り教育を可視化するシステムを導入すること、ガバナンスの高い講義の構成をすること、能動性を高める仕組みを取り入れることである。私の教育の目的は、意欲の高い学生が自ら思考できる人間力を獲得すること、意欲の低い学生や習熟度の低い学生が能動的行動に移るきっかけを作ることである。

1) 本国の教育への理解

日本を取り巻く社会特徴の一つは、変化の早さである。世界的トレンドである脱炭素化、IT化はもはや意識的に止めることは困難であり、日本のガラパゴス化は他国の成長速度に追いついていない査証となっている。教育機関は社会的要請に対応する側面があり、大学は教育と研究を一体不可分のものとして人材育成と研究活動により社会を支えている（文部科学省, 中教審第211号, 2040年に向けた高等教育のグランドデザイン）。したがって、各高等教育機関においては、急速に変化する社会課題に対応できる人材をどのように教育するかという説明責任があると考ええる。

文部科学省が提示する「社会に開かれた教育課程」を基盤に、日本の高等教育は大きな変革を迎えている。体系的で組織的な教育活動、学修成果の評価方法の明確化、学生が身に着けるべき能力の明確化などエビデンスに基づいた教育を行うための「教育の可視化」が求められている。これは、教育の質を高めるための基本であると考ええる。

2) 理学療法士・作業療法士教育の現状への理解

申請者は本学で教鞭をとる中で、理学療法の教育法について検証してきた。厚生労働省の報告によれば、医療福祉領域の就業者数の人口割合は2018年12%から2040年にかけて18～20%に増加すると推計されている。今後、社会における医療福祉の重要性、求められる質はさらに高まると考えられる。しかし、医療福祉領域の教育に着目すると、医学教育や看護教育に関する研究が蓄積する一方で、コメディカル教育、特に理学療法士・作業療法士の教育については科学的検証に基づいた調査が欠落している。2020年は理学療法士作業療法士養成校指定規則が約20年の空白の後に改訂し、理学療法士教育の転換期でもあった。以前より教育内容の未整備や標準化の不足が指摘されていたことが、改定の理由のひとつである。すなわち、理学療法をはじめとしたコメディカル教育では教育効果の評価や教育概念の検証が不足しており、根拠に基づいた教育の推進が課題となっている。

根拠に基づかない教育では、教員は自己の経験や個人的思考錯誤に大きく依存する側面もあり、教育の質について科学的な検証が必要なことは確かである。本国の理学療法・作業療法教育では、何を根拠にするかを含めて検証が不足しており、現状では経験に基づく教育がなされている。特に、教育効果と密接に関係する心理・情動的側面の検証は、日本の理学療法教育ではほとんどなされていない（加藤，2018）。一方、米国では理学療法教育における概念が既に提唱され、根拠に基づいた教育の必要性が提示されている（Jensen GM,2017）。したがって、本国の理学療法における「教育の可視化」に対する意識は諸外国よりも明らかに低く、この現状は抜本的に改革するべきである。

3) 本コースにおける教育の可視化の問題と課題

2020年度の理学療法士・作業療法士養成校における新カリキュラムは20年ぶりの改訂であった。本学においても前年度より変更承認申請提出に向け、カリキュラムの構成が行われ、無事に承認された。しかし、当時の担当者の退職、2020年における新型コロナウイルス感染症の蔓延により、およそ3年もの間、授業を弾力的に行ってきた。その課題を下記と考える。

- ① 建学の精神に基づく大学のディプロマポリシーおよび学科のディプロマポリシー、教育する学生のビジョン、カリキュラムポリシー、各科目のシラバスの一貫性が、教員に浸透していない
 - ② カリキュラムツリーが教員に浸透しておらず、科目間連携が取れていないため、学生にとって理解の難しいカリキュラムとなっている。
 - ③ 頻発する教員退職入職により、新任教員に対する上記①の説明の不足がある。
 - ④ オムニバス形式が少なく、講義や試験の構成など、ガバナンスが低い状態にある。
- 以上のことから、本コースにおいても教育の可視化は課題と考えられる。できる限り

教育を可視化するシステムを導入し、実際の講義と一致性の高いシラバスを学生・外部へ公開することが、質の高い教育の提供につながると考える。

4) 本コースにおけるリベラルアーツの意義

18 歳人口の減少に伴う大学全入時代が到来し、本学でも学生の学力水準の低下および非認知能力の低下の傾向がある。自ら課題を分析、解決でき、主体的に学修できる学生が一定数存在する一方で、入学時点から無気力な学生や、コミュニケーションに課題のある学生など、在校生の多様性は豊かである。多様性の高い集団に対する画一的学修は、教育難度を高くする要因である。初年次教育でアカデミックスキルをレクチャーすることは、大学での学びについて一定水準を獲得することが期待できるため、重要と考えられる。さらに、主体性の高い学生に対しては、早期からアカデミックスキルを活用した能動的学習による成長効果が高いことが期待できる。習熟度別の能動的学習法による学修経験を合わせることで、さらに効果は高まると考えられる。

5) 本コースにおける学生個々への対応

大学教員において学生個々の課題にどこまでオーダーメイドの対応をするかは悩ましい問題である。大学には学問を探究するための考え方や手法を学生に享受するため、意思や能動性が前提とされる。一方で学修者本位の学修も求められている。そのバランスについて共通した見解がないことも本コースの課題と考える。私が個別性の高い指導が本コースで必要と考えた経験に、山梨大学工学部の個別指導がある。同学部においては、国立大学であるにもかかわらず、出席の少ない学生の家庭訪問を教員が行っているとの情報があった。オーダーメイド教育を公的に掲げる本学本コースにおいて、中途半端な個別指導は教育方針および学生募集の観点からも不足となる可能性を感じ、個別性の高い指導が必要であると着想した。

3. 教育の方法

1) 教育上の能力に関する事項として、教育方法の実践例を下記に記載する。

シラバスの作成（H31 年 3 月 1 日～現在に至る）

ディプロマポリシーおよびカリキュラムツリーに基づき、授業の目標や各講義時間の学習内容を記載した。学生が受講しやすい体制を整えた。また予習・復習への取り組みを促進するため、各講義の予復習範囲は、教科書のページ数を指定し、予復習に取り組みやすくなるように配慮した。

該当科目：理学療法演習I-1（配当年次 1 年）、理学療法演習I-2（配当年次 1 年）、理学療法診断学（配当年次 2 年）、日常生活活動学（配当年次 3 年）、評価実習（配当年次 3 年）

Active Learning の活用（H31 年 3 月 1 日～現在に至る）

理学療法の基礎知識およびその利用方法の理解、問題解決能力の向上を促すために、グループワークを通じて能動学修を行った。初年次教育においては能動的な学習法の取り組みとしてアカデミックスキルの経験を重視した。さらに、領域における興味関心を促すために、問題解決型学修を取り入れた。

該当科目：理学療法演習I-1（配当年次1年）、理学療法演習I-2（配当年次1年）、クリニカルリーズニング（配当年次2年）、運動器理学療法評価学演習（配当年次2年）、日常生活活動学実習（配当年次3年）、卒業研究（配当年次4年）

演習授業の実施（H31年3月1日～現在に至る）

知識提供型授業である講義で習得した知識を用いて、実践を想定した演習を行うことで、知識の定着化、利用を促した。

該当科目：理学療法演習I-1（配当年次1年）、理学療法演習I-2（配当年次1年）、クリニカルリーズニング（配当年次2年）、運動器理学療法評価学演習（配当年次2年）、日常生活活動学実習（配当年次3年）

教育心理学的尺度を用いた学生評価の利用（H31年3月1日～現在に至る）

学生の心理特性に合わせた指導をすることを目的として、職業性アイデンティティ、アカデミックモチベーションスケール、Kiss-18、その他いくつかの心理評価を用いて評価した。演習系の科目において、学生の情緒面の成長を促すようグループワーク班の組み合わせを勘案した。

該当科目：理学療法演習I-1（配当年次1年）、理学療法演習I-2（配当年次1年）

学生に対するオンライン授業の効果の調査（R2年4月1日からR3年3月31日）

新型コロナウイルス感染症の拡大により、R2年度より急遽オンライン授業を導入した。これらの学習効果、実施方法の改善を図る目的でアンケート調査を経時的に実施した。この結果は解析し、保護者説明会で保護者に情報提供を行った。教員でも共有を行い、どのようなオンライン授業が効果的か、方法論を共有し、オンライン授業の改善をした。

該当科目：クリニカルリーズニング（配当年次2年）

実習ポートフォリオの作成指導（R2年4月1日から現在に至る）

学外実習に際して、事前学習や事後学習の内容を加えてポートフォリオの作成を行い、事前に立案した実習の目標に対する達成度の確認を行った。

該当科目：見学実習、地域理学療法学実習、検査測定実習、評価実習（配当年次1、2、3年）

国家試験対策のための課外講義（R2 年 4 月 1 日から現在に至る）

副担任の学生および質問に来た学生に対し課外講義を行った。解剖学、生理学、運動学、臨床医学領域、統計学、研究法、試験対策などの理解の及んでいない箇所について個別で聞き取りをし、自己学習の補完をした。

ループリックの作成と成績評価（R2 年 4 月 1 日から現在に至る）

ループリック評価表を作成し、レポート、プレゼンテーション、実技試験、口述試験の採点に用いた。ループリックを用いることにより、学生が学習目標を明確に把握でき、学習の意欲、授業への参加度を高めた。一方で教員間の評価のばらつきが抑制されるよう工夫した。

該当科目：理学療法演習I-1（配当年次1年）、理学療法演習I-2（配当年次1年）、日常生活活動学実習（配当年次3年）

症例検討の実施（R2 年 4 月 1 日から現在に至る）

学外実習後、実際に担当した症例患者の情報をグループ内でプレゼンテーションし、症例に対する介入方法の振り返りや予後の予測などを考察、情報や経験の共有を行った。
該当科目：臨床実習Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ（配当年次2、3、4年）

オンライン授業の実施（R2 年 4 月 1 日から現在に至る）

Microsoft 社の Teams を用いたオンライン授業を実施した。オンライン授業用の講義資料や配布資料を作成し、理解の向上を図っている。講義終了後には課題を提示し、学習の理解度を把握した。

該当科目：理学療法診断学（配当年次2年）、クリニカルリーズニング（配当年次2年）、予防理学療法学（配当年次3年）

オンライングループワークの実施（R2 年 6 月 1 日から現在に至る）

Microsoft 社の Teams を用いたオンライン授業において、オンライングループワークを実施した。オンライン作業ツールを用いた共同作業を行わせ、複数のグループを巡回、助言を行うことで議論促進を誘導した。

該当科目：基礎演習I（配当年次1年）、クリニカルリーズニング（配当年次2年）

オンラインサービスを利用した授業の実施（R2 年 6 月 1 日から現在に至る）

Microsoft Education に含まれるツールを授業に活用した。オンラインストレージによる課題提出や資料共有、オンラインフォームによるリアクションペーパーの提示や習熟度確認テストの実施、レポートの採点やフィードバックの提示を行った。

該当科目：理学療法演習I-1（配当年次1年）、理学療法演習I-2（配当年次1年）、基礎演

習Ⅰ（配当年次１年）、基礎演習Ⅱ（配当年次１年）、運動学Ⅰ（配当年次１年）、理学療法診断学（配当年次２年）、クリニカルリーズニング（配当年次２年）、運動器理学療法評価学演習（配当年次２年）、内部障害系理学療法評価学演習（配当年次２年）、栄養学（配当年次２年）、バイオメカニクス（配当年次２年）、内部障害系理学療法学実習（配当年次３年）、予防理学療法学（配当年次３年）、日常生活活動学（配当年次３年）、卒業研究（配当年次４年）

問題解決型学修の実施（R2年９月１日から現在に至る）

初年次教育においては、同時並行して履修している科目の知識や次年度に学ぶ科目の知識を利用する課題を提示し、能動的学習方法の獲得を促した。２年次以降では、模擬患者や紙面患者情報を用いて、理学療法における評価や治療計画を立案させた。また、臨床実習で学生が担当した患者情報から、少人数制のグループで意見交換・討論を行い、能動的学習の方法や姿勢、知識の活用を促した。

該当科目：理学療法演習Ⅰ-Ⅰ（配当年次１年）、理学療法演習Ⅰ-Ⅱ（配当年次１年）、理学療法演習Ⅱ-Ⅱ（配当年次２年）、臨床実習Ⅲ・Ⅳ（配当年次３、４年）

実技試験の実施（R2年９月１日から現在に至る）

学生の実技、技能の採点に実技試験を用いた。ルーブリックの事前提示によって達成度を共有し、必要な実技、技術の復習を行った。試験後にはフィードバックにより学生の学修を促した。

該当科目：理学療法演習Ⅰ-Ⅱ（配当年次１年）、日常生活活動学（配当年次３年）、評価実習（配当年次３年）

教育的動物実験の実施（R2年９月１日から現在）

肉眼解剖学の理解を促すため、実験動物を用いた教育的動物実験を行った。学生には動物倫理に対する講義と事前学習を行い、実験に臨んだ。臓器の位置関係、骨構造、呼吸循環応答の変化や動的特徴などを確認した。

該当科目：臨床実習Ⅳ学内（配当年次４年）

その他：生体構造機能研究会（サークル）での活動

ドットボーディング法を用いたグループワークへの学生参加度の評価の導入（R3年４月１日から現在に至る）

企業での企画採点に用いられるドットボーディング法を利用し、学生間のグループワーク参加度を可視化した。学生個々のグループワークでの役割を確認し、グループワーク班内で作業課題の偏りがいないか確認、評価した。学生へ定期的にフィードバックすることで、グループワークでの作業分担や発言の重要性について理解を促した。

該当科目：理学療法演習I-1（配当年次1年）、理学療法演習I-2（配当年次1年）

能力別グループワークの導入（R3年4月1日から現在に至る）

グループワークの効果を高めるため、能力別のグループワーク班を設定したグループワークを実施した。高学修の班には課題難易度の高い問題提示型学習課題を提示し、低学修の班には基礎的な課題かつ教員からの助言頻度を多く行った。課題難易度の差が採点結果に影響しないようにルーブリックを作成した。

該当科目：理学療法演習I-2（配当年次1年）

卒業研究指導の実施（R3年4月1日から現在に至る）

2021年度において、脾臓における免疫細胞分布の観察を研究テーマに3名、骨格筋における収縮弛緩動態の観察をテーマに2名の計2課題を実施した。学生には実験動物管理方法、動物実験手技、形態学的手技、データ解析、卒業論文作成を行った。なお、テーマの一つは日本解剖学会にて口述発表を学生が行った。2023年度においては、脾臓における免疫細胞分布の観察を研究テーマに2名、大学生アスリートにおけるメンタルヘルスの調査をテーマに2名、計2課題を実施している。

該当科目：卒業研究（配当年次4年）

口述試験の実施（R3年4月1日から現在に至る）

筆記試験以外での評価として、口述試験を取り入れた。突発的なやり取りの中で柔軟に回答、解説が可能な水準の、知識理解できているかを評価した。

該当科目：理学療法演習I-2（配当年次1年）、日常生活活動学（配当年次3年）、評価実習（配当年次3年）

反転授業の実施（R4年4月1日から現在に至る）

対面授業における実技時間、グループワーク時間の確保のため、課外に知識提供型講義を配信した。実施の習熟度はオンラインテストを用いて確認した。

該当科目：日常生活活動学（配当年次3年）

国家試験範囲の変更に伴う本学の授業内容の一致性の調査（R4年11月からR5年3月）

2023年度卒業生が受験する国家試験より、範囲が大幅改定される。本学で行われている授業内容と変更される国家試験範囲がどの程度一致しているか調査し、可視化した。

評価実習の構成の修正（R5年1月から現在に至る）

評価実習の科目担当を引き受けるにあたり、科目の課題であった教育の可視化および教育方針の明確化を図った。事前学内実習では、実習に配置する学生の能力をシラバス

に明記し、事前の口頭試問および実技試験によって質を担保した。学外実習では実習協力施設による採点を4件法から11段階定量評価に変更し、採点項目も総合評価1項目から情意面評価と知識・技能評価の2項目とした。事後学内実習では、認知領域の評価に症例報告書、教育の3領域の総合評価に成果報告会、精神運動領域の詳細な評価に臨床検査能力試験を計画した。また、事前事後に教員と面談する機会を設け、学生の思考や行動、思い等を共有する場とし、学修者主体の学びの支援を計画した。

該当科目：評価実習（配当年次3年）

3年生後期の課外プログラム立案（R5年1月から現在に至る）

理学療法学科のカリキュラムでは、3年生前期におおよその必修科目が修了し、後期は評価実習のみが必修科目となる。学生の能動的・自律的学修を促すために、課外プログラムを計画した。正課授業において行われていない範囲の講義、教員の得意とする領域の講義、臨床に実践的に行うことができる講義といった、特別講義を計画した。また、国家試験対策の一環として、基礎医学領域の知識確認テストにインセンティブを付与することで、自律的な行動を促すように計画した。

2) 製作した教科書、教材について、下記に記載する。

授業の要点をまとめた配布資料の作成（H31年3月1日から現在に至る）

授業毎に要点をまとめた配布資料を作成し、予習・復習の際に使用できるように配慮した。また、教科書に加えて自身の臨床経験や、研究結果から得た知見、重要な論文について紹介し、配布資料の作成を行った。

該当科目：理学療法演習I-1（配当年次1年）、理学療法演習I-2（配当年次1年）、基礎演習I（配当年次1年）、基礎演習II（配当年次1年）、運動学I（配当年次1年）、理学療法診断学（配当年次2年）、クリニカルリーズニング（配当年次2年）、運動器理学療法評価学演習（配当年次2年）、内部障害系理学療法評価学演習（配当年次2年）、栄養学（配当年次2年）、バイオメカニクス（配当年次2年）、内部障害系理学療法学実習（配当年次3年）、予防理学療法学（配当年次3年）、日常生活活動学（配当年次3年）、卒業研究（配当年次4年）

講義で使用するパワーポイントの作成（H31年3月1日から現在に至る）

教科書で理解が難しい部分などを中心に、内容を簡潔にまとめた講義用パワーポイントを作成した。視覚的に印象に残り、集中力の持続を促すことに加え、領域に興味を持てるように配慮した。

該当科目：理学療法演習I-1（配当年次1年）、理学療法演習I-2（配当年次1年）、基礎演習I（配当年次1年）、基礎演習II（配当年次1年）、運動学I（配当年次1年）、理学療法診断学（配当年次2年）、クリニカルリーズニング（配当年次2年）、運動器理学療法評

価学演習（配当年次 2 年）、内部障害系理学療法評価学演習（配当年次 2 年）、栄養学（配当年次 2 年）、バイオメカニクス（配当年次 2 年）、内部障害系理学療法学実習（配当年次 3 年）、予防理学療法学（配当年次 3 年）、日常生活活動学（配当年次 3 年）、卒業研究（配当年次 4 年）

アカデミックスキルの解説書の作成（R3 年 3 月 1 日から現在に至る）

大学における能動的学習法の獲得を目標として、初年次教育にはアカデミックスキルの経験を重視した。社会人に求められる能力、グループワークの意義、グループワークの手順、論理的思考法、型に基づいた文章作法、プレゼンテーション方法について簡潔にまとめ、授業で活用した。

該当科目：理学療法演習I-1（配当年次 1 年）、理学療法演習I-2（配当年次 1 年）、クリニカルリーズニング（配当年次 2 年）

反転授業用の動画教材の作成（R3 年 3 月 1 日から現在に至る）

反転授業の実施のために動画を作成し、配信した。一つの動画の時間を短くすることで、学生の負荷を軽減しつつ、重要なポイントを理解できるように解説した。動画視聴の確認として、閲覧後に課題の提出を求めた。動画の作成にあたって注意の持続を促すため、話し方や背景音楽などに工夫をした。

該当科目：理学療法演習I-1（配当年次 1 年）、理学療法演習I-2（配当年次 1 年）、日常生活活動学（配当年次 3 年）

新カリキュラムに合わせた学外実習の手引きの作成（R5 年 1 月から現在に至る）

旧カリキュラム対応の学外実習の手引きを、新カリキュラムの内容へと改定した。実習科目担当者および実習業務に係る教員、作業療法学コース教員と共同し、旧学外実習の手引きの大幅加筆および修正を加え、現在のカリキュラムや教育ビジョンに適する内容とした。

4. 教育の成果・評価

・日常生活活動学実習

本科目は、2021 年度は旧カリキュラムで 23 単位、2022 年度は新カリキュラムで 15 単位と、開講数を減らす中で学生に享受する内容を落とさないよう考案するひつようがあった。そこで、旧カリキュラムでは講義に続く実技で 1 日を構成していた内容を、動画による反転授業を導入することで解消を試みた。事前の 1 週間に動画視聴によって知識を確認し、開講時は実技指導を主体とした。

2021 年度アンケート結果を確認すると、知識および実技に対する好意的な意見が多くあったが、2022 年度の反転授業導入時の学生アンケート結果は平均値より低く、狙

いであった予習復習を行ったという項目が特に低値であった。本コースにおいて反転授業を導入している科目は他にないため、反転授業に対して好意的な反応があった一方で授業外に宿題的課題に対する反感があったことが、学生の意見から読み取れた。事前の意図の説明が不足していたこと、実際に学修しやすい内容になっていたのかを核にする必要がある。ただし、回答率が15%未満であり、極端な回答であるか考慮する必要がある。

・理学療法演習Ⅰ-1 および理学療法演習Ⅰ-2

本科目は前期から後期を通じて連続して行う科目であり、私が担当するにあたって、基礎演習で経験するリベラルアーツの一つであるアカデミックスキルを理学療法課程に置き換えた内容を伝える科目と定めた。この科目の目的は、自らの思考によって主体的に課題を解決する手法を学ぶとともに、他人と共同して課題を解決する手段を得ることである。

前期科目のテーマは初学者的にアカデミックスキルを経験する内容として、①グループワーク（ディスカッション、プレゼンテーション、レポート）における作法やルールの経験、②演習班のメンバーと共同する経験、③教員および外部基準の連絡方法を身に着ける、④演習担当教員の特徴をつかむ、⑤答えのない医療倫理を題材とすること、⑥これからの大学生活のビジョンを得ることを挙げている。また、多様な学生が入学していることから、医療倫理や接遇についても学生にディスカッションを投げかけ、どのような素養や行動が必要か、規範的行動について検討することで医療人材としての専門性を向上させている。

後期科目でのテーマはアカデミックスキルを具体的なカリキュラムの課題解決に用いる内容として、①習熟度別グループによるグループワーク経験、②既習の知識を用いて課題を解決する経験、③未習の課題を自ら解決しようと行動する経験、④グループ学習による現実的な課題の解決経験、⑤実技試験対策の経験を挙げた。

2021年度においては導入当初であった。理学療法演習Ⅰ-1については、おおむね意図した通りの授業の反応があった。ネガティブな側面とすると、密度が高く、学生にとって難易度が高い授業であったと判断する。反転授業などの、授業効率を向上することで、学生の負荷を減らすなどの工夫が必要と判断した。理学療法演習Ⅰ-2については、授業難易度がさらに高くなったが、コロナ禍の影響もあり、学生と教員の共同を促進することが課題として挙げた。また、ほか科目との進捗を合わせるひつようがあった。

2022年度においては前年度の反省を一部修正した。自由項目には科目の狙いに沿った感想が記載されており、昨年度よりも改善されたことが読み取れた。しかし、教科書・配布物については内容も含めて改善が必要と考えられる。理学療法演習Ⅰ-2では、グループワークテーマの刷新と、実技試験課題の大幅修正をおこなった。それにより、前年度よりも好意的なコメントが増加した。

今後の課題としては、教員と学生間の共同作業の円滑化による学生への支援量の増加、課題内容の修正などが必要と考えている。

5. 今後の目標

短期目標：授業内容のバリエーションの増加と、授業の可視化

1年生科目においては、学年の特色が強くみられる傾向があり、その都度課題に対する学生の反応が異なっている。授業の内容に幅を持たせ、学生の反応に応じて課題の修正、フィードバック量の修正など行うことができることが望ましい。そのほかの授業においても、カリキュラムツリーを意識した授業構成、実際の講義と一致性の高いシラバスの作成、成績の明確化など、授業の可視化を行うことが建学の精神に対する学生の成長を促すと考え。そのため、高い質の教育の提供には、教育の可視化の推進が必要と考える。

長期目標：学生の主体性を高め、理学療法士及び社会人としての思考力を養うシステムを授業に導入する。また、学生個々の目標を実現するための課外活動を提供する。

大学教育の意義、学生の求めているもの、学生が現実的に取り組めるだろう課題を総合的に組み合わせて、個々の主体性を高める仕組みが必要と考える。それは、理学療法士として患者に提供する医療の質を高めるだけではなく、今後の本国において労働者に一般的に求められるだろう問題発見力、適切な予測能力、革新性といった思考力を養うことにつながる（経済産業省、未来人材ビジョン）。

また、学修者本位の学修を進めるためには、正課の過程以外にも正課外での活動が重要と考えられる。学生の能力を向上させ、社会での生きる力を獲得するためにも、自らの興味に基づいた様々な経験、スキルの獲得をできる環境を提供することが、教育の質を高めると考える。